

## まとめ

---

### 雪国における新しい地域経営のあり方を求めて

「新たな公」による北陸の地域づくりの調査研究委員会 代表  
和田 惇

今年度は数次にわたる現地の方々へのヒアリングと5回の委員会を経てこの報告書が完成した。

昨年度は「新たな公」について、各地で行われている実例とその意義や必要性などについて討議を重ね、その成果を報告書としてとりまとめた。

今年度は「新しい公」による地域づくりの実現に向けた具体的な研究テーマとして、各委員から提案があった中から、住民を中心とする組織で道路から個人の住宅までの雪処理を一括して行う、「新たな公による地域除雪システム」を取り上げた。また、調査のモデル地域として長岡市山古志地区を選んだ。

本研究は、地域の除雪の課題解決をきっかけに地域の発展策を検討するため、地域の除排雪に関わる現状と課題を明確にして、地域の除雪に関わる対策とツーリズムなど通年の地域経営手法について考察した。

山古志地区での雪処理の現状は、国道および県道を新潟県が担当し地域の建設業者が業務を受託して行われている。さらに、市道を長岡市が担当し、市直営班と建設業者で行われている。また、要支援世帯の屋根雪おろしは市からの費用支援で、業者や集落の有志のグループなどで行われている。

ヒアリングによる調査は住民や区長のほか除雪業者、長岡市、新潟県、北陸地方整備局の担当者から聴取した。行政担当者は住民の要望の増大と公共事業費の減少および建設業者の廃業を危惧している。市の直営班も従業者の高齢化にともない業務の継続に不安を感じている。

建設業者は従業員の高齢化とともに、公共事業の減少による建設業の存続のほか、豪雪地域で築いてきた高い除雪技術力の維持に不安を感じている。また、屋根雪おろしを担当する集落の有志のグループなども高齢化に悩んでいる。

山古志地区では最近の少雪にも助けられ、現状の除雪レベルに不満を感じている状況にはないが、地域の力のぎりぎりのところで行われており、今後とも現状を維持することは困難と思われる。

この対策として、住民を中心とする組織で道路除雪から個人の住宅まで雪処理を一括で行う仕組みづくりを取り上げたが、実施するうえで、法制度、行政間の連携、地域ごとのサービスレベル、住民負担への抵抗感、住民の自立への意欲など多くの課題が明らかになった。

地域の雪処理に関して「自助」や「互助」の力を再生するため、除雪に関する地域内外の力を集め、地域内のニーズに応じて配分する役割を担う「山古志地区除雪協議会（仮称）」の設置のほか、除雪空間別の担い手、除雪ボランティア、資金調達の方法などを検討した。さらに、地域を維持してゆくため、次世代の人材の確保や地域での生業と資金の確保のほか、除雪の技術研修会、オペレータ育成講習会などを通じた人材育成と技術継承の拠点化などについて検討した。

新しい公による地域除雪システムを実現するために、各委員からの提言を第4章に記載しているがその一部を紹介する。

諸橋委員。国の財政難のなかで、公共サービスの根本が問われている。地域住民、行政、NPOなど協働して新しい仕組みづくりが必要であり、住民の意識変化のエネルギーが新たな公の原動力になる。

上村委員。かつて、冬期の生活道路は住民の雪ふみで確保されていたが、いまでは行政による道路除雪や屋根雪おろしまでが外部化され、公共サービスは住民にととって他人事、無責任の意識の定着につながってきた。新たな公共とは「他人事でない仕組みづくり」である。クローバーバスは地域自治・地域経営の一つ形を示唆し、地域一括除雪は財源と業務の受け皿としてコミュニティの進化を期待している。「越後雪かき道場」は昔のコミュニティに外部者の侵入を許すことで「新たな地域の公」を獲得しつつある。「新たな公」とは民主導の行政と住民のギャップを埋める切り札である。ヨソ者が関わることで新たな価値の創造が生み出されたと実感している。

河村委員。グリーンツーリズムは大衆向けの旅行ではなく、本物志向、希少性を求める旅行で、マニュアル通りの「体験」するのではなく「体感」することであり、自分たちの「日常」が地域の資源であると認識することが大切である。行政は一步目を背中から押し、軌道に乗ったら突き放す役目が重要となる。

上野委員。阿蘇野焼きボランティアの経験から、ボランティアツーリズムは社会事業に無料奉仕しながら、日頃の仕事や生活とは全く違った環境に身を置くことが、精神的なりフレッシュになるとともに、奉仕から得られる達成感や感謝を受けることが各人の喜びとなる。

葉袋委員。どの過疎地域でも若者に対する期待は大きい。若者のアイデアや、協働してパワーを得ること、さらには将来の後継者になることが期待される。雪国の暮らしの豊かさを知り、雪のある生活に対する印象を変える機会になる。このため、手本を示し、その楽しみ方、工夫の仕方を知らせると同時に、必要な道具や知識を十分に用意しておくことが重要である。

原委員。満足感が高く、自分より他者や社会に役立つ事に喜びを感じる「ボランティアツーリズム」という新しい概念と行動と考える方がわかりやすい。

本研究はモデル地域を長岡市山古志地区としたが、どこの地域でも適用できるものと考えている。各地の「新たな公」による活動が新しい日本を創造することを期待している。

北陸地域づくり叢書 No. 3

## 「新たな公」による北陸の地域づくり

---

平成 22 年 3 月

発 行

社団法人 北陸建設弘済会 北陸地域づくり研究所  
新潟県新潟市江南区亀田工業団地二丁目 3 番 4 号 〒950-0197  
Tel (025) 381-1020 Fax (025) 383-1205

印刷・製本

(株) 第一印刷所

---

落丁本、乱丁本はお取り替えいたします。

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作権と当会の権利侵害となります。

社団法人 北陸建設弘済会  
北陸地域づくり研究所